

# 生死出ずべき道

コロナの時代、私たちはいかに生きるべきか

一楽真

生しょう死じ出いずずべべきき道みち

コロナの時代、私たちはいかに生きるべきか

## 発刊によせて

この冊子は二〇二一年六月二日に開かれました真宗大谷派大阪教区第十二組「女性のための真宗講座」にて、大谷大学の一楽真先生にお話しいただいた内容をまとめたものです。

昨年から新型コロナウイルスが世界に蔓延し、一年以上経った現在でも収束の気配は見えません。人びとはワクチンの接種にわずかな希望を見出していますが、まだこの先どうなっていくのか、まったく見通しが立たない状況です。

そんな中、大阪教区第十二組でも、所属各寺院の法要などがあいついで縮小され、また組の行事も中止を余儀なくされてきました。当「女性のための真宗講座」も『歎異抄』を一楽先生に講義いただいておりますが、今年は坊守・寺族のみの参加とし、「今のこの状況下で、どのように生きていくのか」というテーマで、先生にお話しいただいたことです。

その折に「せっかく先生にお話しいただいたのに、少人数が聞いているだけではもったいない」という意見があり、組内で協議した結果、冊子として出版させていただく運びとなりました。この冊子が組内のみならず、有縁の方々にはひろく読まれることを念願しております。

最後になりましたが、出版をご快諾いただき、ご多用のところ校正の労をお執りくださいました一楽先生に、あらためて御礼を申し上げます。

二〇二一年八月

真宗大谷派大阪教区第十二組組長 越浦 龍成

## 目次

|             |    |
|-------------|----|
| はじめに        | 5  |
| 後世を祈る       | 7  |
| 生死出づべき道     | 15 |
| ただ念仏        | 21 |
| コロナ禍を超えて    | 24 |
| 寛喜の内省       | 28 |
| とらわれの心、自力の心 | 35 |
| 他力の信心うるひとを  | 41 |



## はじめに

「今のこの状況、時代をどのよう<sup>ちようだい</sup>に生きていくか」というテーマを頂戴いたしました。もちろん私がその答えを持っているわけではありません。しかし聞法<sup>もんぽう</sup>というのは我々に先立つて悩んでくださった方、生きる道を求めてくださった方に聞いていくということであり、時代が変わっても、国が違っても、生きること<sup>せんだう</sup>に悩まれた方々が我々に先立つておられる。その方々の生き方に学ばせていただく。

昔の人のことなんか聞いてもしかたないということなら、仏教の学びというのは始まらないわけであり、ですから勉強会の形は取りますけれども、けっして新しい知識を憶<sup>おぼ</sup>えてもらうのではなくて、そういうものの見方、考え方を、先達<sup>せんだう</sup>にたずねていくということだと思えます。

今回テーマをいただいた時に、やはり宗祖親鸞<sup>しゅうそ しんらん しやうにん</sup>聖人のお姿、お言葉にまずたずねていきたいなということ<sup>せんだう</sup>を思ったわけであり、八百年前の親鸞聖人の時代は、科学技術も医療もあまり進んでいませんから、疫病<sup>せんだう</sup>ということで言えば今以上に、いわば祈るほかないような状況だったと思います。

現代でもそうですが、こういう問題が起きると、「お坊さん、なんとかしてください」「仏教はこういうことになにか力を持っていないんですか」と聞かれます。お経を読んだりして、

疫病を退散するというような儀式は色々な宗派でなさっておられます。それを云々するつもりは一切ありませんが、しかし親鸞聖人の書かれたものを読んでいると、驚くほどそういうものは少ないのです。「現世利益和讃」には若干それに重なることはありますけれども、しかし私たちが思うような形で、疫病が退散するということは書かれていないわけです。

さらに二千五百年さかのぼ遡しやったお釈迦様も、なにを教えてくださいましたのかと言ったら、けっして病気になる方法じゃないんですね。疫病が流行はやる中で、命終わっていくこともあるわけですよ。その中で死なない方法を教えてくださいましたのがお釈迦様だと言うわけにはいかない。いろいろなことがある中を、なおも生きていくような力、勇気を見出してくださいましたのがお釈迦様であり、あるいは親鸞聖人のお言葉ではないかと思うわけです。

しかしこのことを始めからお話しますと、これは学生たちでもそうですが、「なんや」と言われます。「仏教ってなんの力もないんですか、ご利益りやくないですね」って言われることも多いわけです。しかし本当の意味の利益とはなにかというのが、親鸞聖人の問いだと思います。目の前の都合の悪いことを取り除いてくれたら、私たちはそれで「助かった」と言います。しかしそうなら、また問題が起こってきた時には、それを取り除いてもらわないといけない。それはずっと問題を恐れ続ける、いろいろなことが起こってくるから逃げるような生き方になるのかもしれない。

親鸞聖人の生き方というのは、いろいろなことがある中を生きていける、ものすごくたくまし

い教えだと思うんですね。これを「真実の利益」とか「無上の利益」という言葉で聖人は語ってくださっています。

### 後世を祈る

ただそうは言いましても、親鸞聖人も始めから今遺のこしてくださっているようなお言葉が全面に出ておられるわけではありません。比叡山ひえいざんで二十年修行をしておられる時には、やはり迷いをななくす道、あるいは問題の中でよくよと悩むことのないような強い立派な私になつていく道に立っておられたのです。

「煩惱具足の凡夫」というのが真宗しんしゅうの立場であります、その煩わづらい悩みを断ち切るのが問題解決の道だと、比叡山時代は信じておられたわけです。煩わづらい悩みがなくなる境地を目指して、修行に励んでおられたと言つていいと思います。しかし親鸞聖人は、二十年やってみてその煩わづらい悩みが消えなかつたんですね。わかりやすい言い方をすれば、腹が立つ心ひとつが消えない。あるいは同じ修行をしている仲間同士でも、「あいつに負けた」とか、「俺はあいつよりは上だ」という妬ねたんだり憎にくんだりという気持ちがなくならなかった。これが聖人の二十年だと思えます。

そんなものだと開き直ることができたなら親鸞聖人は比叡山を下りる必要はなかったと思いま



す。なぜならまわりもみな、煩惱を断ちきらないといけないと言いながら、その内実はぜんぜん違っていたわけです。

当時、比叡山の僧は国家公務員の待遇ですから、比叡山にいたら食べていけます。疑問があってもそんなものだと高をくくれば、親鸞聖人も山を下りなくてよかったわけです。ではなぜ下りられたか。ここが大事だと思っうんですね。

嫌になつて逃げ出したのではないと思います。それなら二十九歳まで頑張がんばらないと思います。もうちよつと若い頃、十八、九歳で逃げ出してもいいんじゃないでしょうか。二十九歳まで頑張つたということは、やはり九歳から縁を持つた比叡山の仏教が大事だと思つていたからですよ。ところが、煩惱を断ちきれば迷いから解放されるということは理屈ではわかりますけれども、煩惱がなくならない。腹立つ心は一瞬で湧わいてきます。こんな自分はダメなんじゃないか、仏教から漏れ落ちるんじゃないかという危機感もあつたと思っうんですね。そんな中で、比叡山を下りて、六角堂ろっかくどうに百日籠こもつた上で、法然上人ほうねんしょうにんの許もとを訪ねられるわけです。

今年、聖徳太子の千四百回忌ということで、大阪の四天王寺でも大きな法要が予定されているようです。また奈良のほうでも、法隆寺を始め興福寺などで行われるようです。日本の仏教の中で聖徳太子を馬鹿にする人はいません。しかしその聖徳太子はなにを教えてくださったかといえ、修行しなさいって言つたわけじゃない。だつて在家ざいけの信者さんですから。結婚生活もなさり、子どもさんもいらつしやいました。そんな中で仏教ぶつしゆを勧めていった。その時には山に上る仏教で

はないんですよ。修行して煩惱を断ちきる仏教ではなくて、日常生活の中でいただける仏教です。六角堂でこの聖徳太子の励ましをいただいて、親鸞聖人はようやく法然上人の許に行くんですね。その時の親鸞聖人のお気持ち、お心が『恵信尼消息』に残されておりまして。これは当時、越後におられた親鸞聖人の妻である恵信尼様が、京都で聖人の身の回りのお世話をされていた娘の覚信尼様に宛てられたお手紙です。恵信尼様は親鸞聖人よりも九つ下の寅年です。親鸞聖人はひとまわり前の巳年生まれです。親鸞聖人が九十歳で亡くなられた時、恵信尼様は八十一歳ですね。そして娘の覚信尼様は、恵信尼様が数え四十三歳の時の子どもですので、八十一歳のお母さんが、三十八歳の娘に送っている手紙です。

昨年の十二月一日の御文、同二十日あまりに、たしかに見候いぬ。(聖典六一六頁)

親鸞聖人が亡くなったのが十一月二十八日です。おそらく次の日、二十九日に葬式をして、お骨になるの一日がかりだったと思います。昔はお月様の暦ですから、二十九日で終わる小の月と、三十日で終わる大の月があるんですが、この年は十一月は三十日までありました。ですからお骨拾いを終えて十二月一日付で書いたお手紙なんでしょうね。それが「同二十日あまり」ですから、二十日あまりかかって新潟の恵信尼様のところに届いているんですよ。

それで、「たしかに見ました」と。当時の通例でしょうね。今のように郵便事情はよくありません。

手紙だけ届けてくれる人はいません。何かの物資に託して届ける。それがきちつと届きましたよということをまず言っておられます。

そしてその次の言葉がすごいです。

何よりも、殿の御往生、中々、はじめて申すにおよばず候う。（聖典六一六頁）

「殿」というのは親鸞聖人のことです。「殿の御往生」つまり親鸞聖人が往生なさったのは、「中々、はじめて申すにおよばず候う」ですから、いまさら、初めて申すまでもありませんという意味です。

あとまで読んでいくとわかりますが、どうも娘の覚信尼様は、お父さんである親鸞聖人の往生を疑っているんですね。ですからここからは私の推測ですが、親鸞聖人は最後は南無阿弥陀仏を称えることができなかつたかもしれません。あるいは苦しまれて、まわりのご家族にも「今までありがとう」というお礼の言葉、お別れのご挨拶も言えなかつたかもしれません。そういう死の方を見せられたものですから、娘は「お父さんは本当に往生したんでしょうか」と疑った。

私たち『御伝鈔』では、「ついに念仏の息たえましましおわりぬ」（聖典七三六頁）と読んでいます。「ついに念仏の息が絶えられた」と。それはそれで間違いないことです。「南無阿弥陀仏」とその時、発音してたかどうかじゃないですね。

でもここはそうではなく、娘とお母さんのやりとりです。その時に、「お父さんは本当に往生

したんだろうか」と書いてあったものですから、「あんた何言うてるんや」という感じだと思えます。「親鸞殿の往生は今さら言うまでもありません。死に方で戸惑ってはいけませんよ」と。もちろん娘ひとりに宛てた手紙ではなく、まわりの人にもよくそのことを言ってくれたいとおっしゃっていますので、たぶん京都ではざわついてたんでしようね。「親鸞聖人って偉いお坊さんだつて聞いてたけれども、本当に往生できたのだろうか」と。

これ、どうでしょうか、私たち今でも言いませんか。「あんな死に方したら、成仏じょうぶつできるやろか」みたいに。それは死に方が悲惨だつたり、あるいは前後不覚のようなことになったら、悔くいは残るかもしれない。しかしながら親鸞聖人のお手紙にもはつきりとありますが、臨終の形は問題じゃないんです。ひとりの人が一生を終えられたという意味では、本当にかげがえのない人生を尽くされたということです。「臨終の善悪をばもうさず」（聖典六〇三頁）と親鸞聖人のお手紙で明確におっしゃっています。

恵信尼様はそれを受け継いでいますので、たとえ苦しんで亡くなったとしても、あるいはご挨拶できなかつたとしても関係ない、「あなたのお父さんはこういう人だった」ということを娘に明確に言い、そして「まわりにもそのことをちゃんと共有しといてくださいね」というお心の手紙なんです。

けっこうきつい言葉だと思えますよ。八十一歳のお母さんが三十八歳の娘に手紙を出すのなら、「確かに見ました」のあとは、普通はこんな言葉が入りませんか。「長いこと看病ありがとうね」

と、苦勞をねぎらうんじゃないでしょうか。お礼を言つて当然だと思ふんですよ。しかしその前に「殿の御往生は今さら言うまでもありません」と書いてあるということは、よほどこれだけは言つておかなければならないという思いがあたりになつたのでしょうか。

結果的にこの手紙が出されたのは二月十日です。だいぶ間があいています。どう書こうかを悩んでいらつしやつたのかもしれませんが。あるいは四十九日のお勤めが終わつて、区切りがついたところで出したのかもしれませんが。それは、わかりません。ただ、娘にきつちりと言つておかなければいけないという思いがあつたに違いないと思います。

このあとに、先ほど申し上げた、親鸞聖人が比叡山を下りて、六角堂に百日籠つて、そしてそのあと法然上人の許に行つたということが出てきます。「あなたのお父さんはこんな人だつたということを、もう一度言つておくぞ」という、こういう感じのお手紙であります。そこに親鸞聖人が何で悩んでいたのかということが、たいへんよくわかる言葉があります。

山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ給いけるに、（聖典六一六頁）

「山を出でて」、これは比叡山を出てということですが。「六角堂に百日こもらせ給いて」。「六角堂参籠」と言われます。六角堂に百日間お籠りになつた。廣瀬杲先生が、「山を出でて」というのは、六角堂で行き先が見つからなかつたらまた比叡山に戻ればいいという中途半端で行つたん

じゃないと、繰り返しおっしゃっておられました。「山を出でて」というのは、文字通り退路を断つて、戻る場所もなくて山を出たということだと。だから六角堂に百日、本当に籠つたのだと強調しておられました。

今も比叡山のほうの伝承では、比叡山から夜な夜な通われたということになってるんですね。京都の六角堂に行きますと、正面入って右手に親鸞聖人のことを大事に思う方が建てられた親鸞堂というお堂が建つていて、そこに駒札こまふだがあります。ここには、夜な夜な比叡山から百日通つたんだと書いてあります。まあ通えない距離ではありません。親鸞聖人は健脚ですからいくらでも歩けるんですが、私は廣瀬先生の言うとおりでと思っています。山に戻る場所を確保したまま来たのではなくて、もう出てしまった。これから先、行き先が見つからなかったら山に戻ることもできない、生きていくことも、死んでいくこともできないような状態じゃなかったかと思っています。

そしてその次、「後世を祈らせ給いける」とあるでしょう。これが親鸞聖人のその時の気持ちを押さえている言葉だと思います。後世を祈っておられたというんですね。国語辞典で「後世」を見ると、「死後の世界」とか、「あの世のこと」とか、「今の次の世」とか書いてあります。そういう意味で使われているのも間違いないですが、親鸞聖人の悩みは、けっして自分が死んだあとどこに行くのかというものではなかったと思います。これは文字どおり、後の世と書いてありますから、今から先、未来のことだと思いません。未来が見えなかったら、私たちは現在も生きられないんじゃないでしょうか。例えば本日がまったく見ええない状況だったら、今日を生き

る元気が出ますかね。

今もコロナでたいへんな状況ですけども、なんとか落ち着いていくのではないかという思いでみんな踏ん張っていますよね。でも思った以上に長く続いている。去年はまさかこんなにかかるなんて誰も思っていないわけですよ。今はワクチンが切り札のように言われて、ワクチンを打っている人はまわりにもどんどん増えてきました。「緊急事態宣言」も解除の方向に動いてきているということがあるわけです。でもわかりません。もう片方でオリンピックもありますから、本当にどうなるかわからない。

明日が見えなかつたら、今日生きる元気も出ないと言えます。逆に一年後にこんな行事があるから、今年から準備をしないといけないと段取りを立てて、それを迎える。そこに毎日、しんどいことがあつても、なにか力が湧くということもありますよね。不思議な話です。未来というのはまだ来ていないんです。来ていないけれども、現在に力を生み出すようなものを持っているわけです。

親鸞聖人が「後世を祈る」とおっしゃっているのは、これ以上比叡山にいても、煩惱を断ちきつて迷いを超えていくことは訪れそうもないという感覚です。しかしだからといって、下りればなんとかなる、それもありませんよ。法然上人のところに行けば、明るい未来が待っているというのだつたら、わざわざ六角堂を経由しなくてもよかつたと思います。比叡山を下りて、そのまま法然上人のところへ突っ走ればいいんですね。

しかし法然上人の「ただ念仏」についても、そこまで断言できるものを親鸞聖人は持つていなかったと思います。今まで修行をバリバリやってきた人です。その立場からすると、南無阿弥陀仏と称えただけで助かるなんていうのは、うさんくさく見える。これは私たちでも一緒です。初めて南無阿弥陀仏の教えを聞いた人で、「ああ、ありがたい教えですね」って言う人はいないですよ。「南無阿弥陀仏と言って助かる？ そんないいかげんな」って言われますよ。やつぱり体を鍛えるとか、お経を山ほど読むとか、そういうことをした向こうにあるのが覚りだというイメージがある。

親鸞聖人は比叡山で二十年修行した人ですから、法然上人はすごい人だとは聞いていたでしょうけれど、なかなか踏み出せなかつたと思うんです。しかし比叡山にも留まれない。山にもいられないし、法然上人のところにも行けない八方塞がりの状況、ぎりぎりのところで、六角堂に籠つてこれから先を祈るしかない。そうしたら聖徳太子が夢告をなされた。それが「九十五日のあか月」ですが、それを縁として法然上人の許を訪ねたと続きます。

### 生死出ずべき道

又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに、ただ、後世の事は、



善き人にも悪しきにも、同じように、生死出すべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば、  
 (聖典六一六〜六一七頁)

今度は六角堂に籠つたのと同じように、法然上人の許に百ヶ日通つたというんですね。いつ六角堂を出たのかというと、『御伝鈔』の記述によれば「四月五日夜寅時」(聖典七二五頁)、現代の暦で言うと五月半ばぐらいでしょうか。そこから数えると八月末で百日です。ちょうど梅雨から、暑くなつて、さらには京都もお盆過ぎの残暑が厳しいですけども、そのあたりまで、ずっと百ヶ日通われた。二十九歳の時のことです。「降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありし」とあります。

そしてその次にも「ただ後世の事は」とあります。親鸞聖人は後世を聞きたかつたんです。私なりに荒つぽく言い切つてしまえば、明るい未来ですよ。道がひらけることを法然上人に聞こうとしたんです。先が見えなければ生きていけないということです。法然上人はそれに対して応答してくださつたんですが、ただ上人のお答えは「こうやつたら明るい未来ですよ」とはおっしゃつていない。「善き人にも悪しきにも、同じように、生死出すべきみちをば」と言っています。「生死出すべき道」つまり迷いのあり方を出ていく道を、一筋におっしゃつたと書いてあるんですね。「善き人にも悪しきにも、同じように」とあります。善人も悪人も、つまりどんな人にも平等に語られたのが法然上人なんです。これは比叡山とは対照的です。比叡山は山の上で修行できる

出家のお坊さんが中心です。例えば男の人でも猪を獲ったり魚を捕ったりして殺生の罪を犯している人は、その正統な道を歩めない。女性は女性であるというだけで、比叡山の修行はダメだと言われている。

これだけなら悪人と女人を排除していますから、そのために法然や親鸞が活動したとなりそうですが、そういう話じゃないんですね。悪人や女人とレッテルを貼って排除しているんですが、しかし「あなた用の道があるから喜べ」と、もう一度抱きこんでいくのが旧仏教であります。これは比叡山だけじゃありません。奈良の仏教も同じです。比叡山は京都にいますとこちら側が表かと思うんですが、表は滋賀県側なんだそうですね。そこに日吉大社があります。比叡山の御本尊が日吉権現という神様となつて、人びとに利益をもたらしていくんですよ。だから女人、あるいは罪深い悪人に対しては、「あなたは山の上で修行はできないけれども、せいぜい日吉権現にお参りして罪滅ぼししなさい」とか、あるいは「善根功德を積みなさい」と言っていく。そういう形で「誰もが仏様のご利益を受けますよ」と言うんです。しかし修行できる善人、善を積める人と積めない人とは別の道になつていくんです。

法然上人は同じなんです。たくさんお経を読んだり、善根功德を積んでいる人が来ても、逆に生き物を殺すことを仕事にしている人が来ても、大事なことはこのことひとつ。平等なんです。親鸞聖人はびつくりしたと思いますね。今まで男の出家者しかいない比叡山で生活してきた親鸞聖人が、男も女も、貴族もそうでない人も、お坊さんも在家の人も、みんな平等にいて、同じ教え

を聞くんです。これが本当の仏教だと思われたに違いないと思います。お釈迦様まで遡ってもそうです。お釈迦様は、男用の道を説いたんじゃないんですよ。お坊さんだけが覚さとりを開けるなんて言つたんじゃないんですよ。誰の上にも成り立つ法則・道を説いておられたのがお釈迦様です。「ここに生きた仏教があつたか」と、親鸞聖人はものすごく感動したと思います。

「生死出ずべき道」、そのことを「ただ一筋に」とある。このことひとつなんです。先ほどの「後世を祈る」に対して「生死出ずべき道」。同じように見えるかもしれませんが、私は中身が違うと思つています。後世を祈るほうはやつぱり明るい未来です。今よりもちよつとは状況が好転する、自分にとつて都合のいいほうに動くことを祈るわけです。誰だつて暗い未来は祈りませんよね。道がひらけることを祈つているわけです。ところが法然上人は「生死出ずべき道」だとお答えになつています。

善と悪、明るい暗いか、あるいは優れているか劣っているか、あるいは勝つたか負けたか、役に立つか立たないか。私たちは価値をふたつ立てて、どつちかが良くてどつちかが悪いと言つています。例えば生と死で言えば、生まれてきて生きていること、こちらが大事ですから、病気になつて死んでいくことは、できるだけ遠ざけたい。しかし生まれたということは、その病気になることも死んでいくことも、備えているわけですよ。

自分にとつて都合のいいほうだけを手に入れて、悪いほうをなくそうということなんてできませんよね。でもそう願う。これがやつかいなんです。明るい未来ならいいけれど、暗い未来な

ら生きていけない。優れてるのはいいけれど、劣っているなんてもう生きていない意味がない。それから勝ち負けもそうです。勝ちたいです、やつぱり。そして有用か無用か。これが一番きついなと思います。役に立つ人間か立たない人間か。生きてる値うちがあるかないかまでやるんです。

上を求めて下をできるだけ遠ざけようというのが、私たちの生き方じゃないですかね。上は良いことだと言ひ、下は悪いことだと言うわけです。しかしたまに逆の人もいます。生まれたことがぜんぜん嬉しくなくて、なぜこんな苦しい思いをして生きなければいけないのか、死んだほうが楽になれるのではないかと、死のほうに苦しみから解放される明るい未来があるかのように思っておられる人もあります。でもこれは価値付けが変わっているだけで、価値付けしていないわけじゃない。だから生に意味があるか、死に意味があるかということは、人によっても状況によっても変わるかもしれませんが、しかしだいたいどちらかに価値を置けば、どちらかは反対です。どちらかがプラスなら、どちらかがマイナスなんです。こういうあり方なんですよ。

先日、大谷大学の宗祖誕生会たんじょうえに、大分の佐藤病院の院長をしておられる田畑正久先生たばたまさひさがおいでくださいました。この方は大学時代から人生について悩んだり、道を求めたりしたご縁で、仏教に深く帰依し、特に親鸞聖人の教えを大事に生きておられます。宗祖誕生会でもありがたいお話を聞かせていただきました。

田畑先生は仏教と医学では生老病死しやうろうびやうしの扱い方が基本的に違ってきましていてとおっしゃるんですね。本当は別物ではないけない。だから仏教徒にももちろん科学的な知識も持つておいて

ほしいけれども、医学の人にも仏教の眼をもっておいてほしいと。医学の立場は今どうなってるかといったら、病気が治らなかつたとか、治らないまま死んだといったら、医学の負けだと思っている。しかし、負けなんて本当はないとおっしゃるんですね。お医者さんがどれだけ頑張っても助けられない命はある。逆にお医者さんがなにもしないでも助かつていく命もあるとおっしゃっていました。

今の医学はプラスかマイナスかでしか見ていないというんです。しかし病気になって、そこから大事なことを学ばせていただくということもありますよね。誰かの死を通して大事なことに<sup>であ</sup>出遇うということもある。だから病気や死はマイナスかという、そんなことは決められないわけです。それを一方的にプラスとマイナスに分けていく。これが今の医学界なんですという話をしておられた。

プラスもマイナスもないという世界に出遇うことが大事である。これを田畑先生はお念仏、阿弥陀の世界と語ってくださいました。でも私には仏教徒も大丈夫ですかとも聞きました。仏教徒も自分にとって都合がいいものをご利益と言ひ、都合が悪くなったら「なんや仏さん力ないわ」って言っているとしたら、結局、発想が一緒ですよ。

法然上人が語ったのは、そこなんです。「生死出ずべき道」とは、生か死かという、どっちがプラスでどっちがマイナスかというあり方を超えるということです。どっちかが良くてどっちかが悪いという考え方から出るといことです。これを法然上人は教えてくださったというのが、

このお手紙の内容だと思えます。

後世はこうしたらいいという答え方ではなく、「生死出づべき道」をただ一筋におつしやつたという答え方になっています。ですから親鸞聖人の問いと法然上人の応答とは、まったく同じとは言えない。同じ場面で起こっているんですけども、法然上人は聞いた者とまったく違うところから答えられているんですね。

親鸞聖人は「どうやったら本当に覚めますか、迷いを超えられますか」という仏教の根本の問いを聞かれたと思います。「どうやったら本当に道がひらけていきますか、比叡山ではそれを感じられませんでした」ということも言ったかもしれません。しかしそれに対してこれから先なにが起ころうとも、どんなことがあるうとも、その中にいられるような生き方は、この「生死出づべき道」なんです。

## ただ念仏

上人しやうじんのわたらせ給わんところには、人はいかにも申せ、たとい悪道あくどうにわたらせ給うべしと申すとも、世々せせ生々せしやうじやうにも迷まよいければこそありけめ、とまで思いまいらする身みなればと、  
 ようように人の申し候おほいし時も仰おほせ候おほいしなり。(聖典六一七頁)

法然上人が行かれるところには、「人はいかにも申せ」ですから、人があんなところやめておけとか、そんな人についていくなとか言ったとしても、「たとい悪道にわたらせ給うべしと申すとも」、たとえ行き先が、地獄・餓鬼・畜生というような過酷な道、悪道であつたとしても、「世々生々にも迷いければこそありけめ」です。迷いを離れられない、どこに行つても迷いが次から次へと起こってくる自分だということがはつきりしたのでという意味です。だから人からどのよう  
に言われても、ここで生き方が決まつたと言つてるわけです。

明るい未来がひらけるなら、法然上人についていくというんじゃないんですよ。どんなことがあつても、法然上人の教えが大事だということが見えたわけです。中身はなにかと言つたら、良いか悪いか、勝つたか負けたか、そういうようにふたつに分けて、どちらかに価値があるというあり方、どちらかがプラスでどちらかがマイナスというあり方から出るといふことです。

この恵信尼様のお手紙と同じことが『歎異抄』で言われている箇所を見ておきたいと思ひます。第二章に出てきます。関東から来られたお同行どうぎやうに対して、親鸞聖人がお答えになられたお言葉です。

親鸞しんらんにおきては、ただ念仏みだして、弥陀みだにたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細しさいなきなり。念仏は、まことに浄土じやうどにうまるるたねにてやはんべるらん、また、地獄じじくにおつべき業じやうにてやはんべるらん。総そうじてもつて存知せざるな

り。  
(聖典六二七頁)

これが「生死出ずべき道」の中身でしょう。「ただ念仏」、阿弥陀仏を念ずるところに、比べることからの解放があるのです。良いか悪いか、プラスかマイナスかと量ることからの解放があるということ。弥陀にたすけられていく生き方です。

比べる心が消えたんじゃないですよ。お経を読んだからといって、プラスかマイナスか量らなくなるのではないのです。心に湧くんです。湧くんだけれども、阿弥陀を念ずる時に、「ああ、良いか悪いかだけじゃなかったなあ」と、あるいは「得か損かで量る必要のないものをまた量っていたなあ」と知らされるところに、その分けている、量っていることに振り回されることからの解放があります。

だって私たちがパニックになつている時は、自分の思いの通じない時です。パニックに落ちている自分を見るもうひとつの眼をいただいたら、「ああ、またなんか浅ましいことになつとるなあ」「また自分中心の思いで人に文句ばかり言うとるなあ」ということが見えてくることがある。だからといってその比べる心がなくなつたわけじゃない。あるからこそ、阿弥陀の世界を念じ続けてくださいというのが、「ただ念仏して」ということでしょう。

『恵信尼消息』では「生死出ずべき道」とありましたが、具体的にそれはなにかと言うと、阿弥陀仏を念じて善し悪しを離れていく道、プラス・マイナスを超えていく道です。自分中心の根



性があるからこそ、それを超えた世界を聞かせていただくことが大事になるということです。

そしてそのあと親鸞聖人は、「念仏が浄土に生まれる種なのか、地獄に墮ちる業なのか、そんなことは私は知りません」とおっしゃっています。つまりいい状況に行くための念仏じゃない。あるいは称とよえて悪い境遇が待ってるからといって、やめるわけにいかない。だって阿弥陀仏を念じなかつたら、もうそれこそ一歩先は真つ暗なんです。自分の思いがいつぱいいつぱいで行き詰まっていますから、どう生きたらいいのかもわからない。それを超えることを法然上人は教えてくださったということで、浄土に行くための念仏じゃないんです。地獄に墮ちるならやめときますっていう念仏と違うんです。行き先の善し悪しを超えてということです。

### コロナ禍を超えて

今、「緊急事態宣言」が解除になって、「まん延防止等重点措置」に移ってきたわけですが、これまたリバウンドということもあるかもしれません。来年はもうないだろうと思っっていますけれど、上がったりがつたりで、四十波目が来ましたとか、もうそろそろ五十波目ですみたいなこともありうるかもしれない。

もう去年入った学生が二年生です。ワクチン打って、みんなとご飯食べたりに集まったり、ある

いはクラブもできるような大学になったらいいねという話を学生たちとしていますが、わからないです。だからその子たちは四年間、コロナで楽しくもない大学生活でしたみたいなことになる可能性もあるわけです。しかしコロナのせいで自分の学生生活はがっかりだったとなるなら、自分で自分の人生の四年間をマイナスイメージだけでレッテルを貼っていることになるかもしれない。一回しかないかけがえのない学生生活が、四年間コロナと共であったとしても、それをつまらない人生だったと言わないような道つてないのか。それがこの親鸞聖人が言ってくださっている「生死出ずべき道」という、法然上人からの教えだと思えます。

念のために言いますが、日常生活を取り戻さなくていいって言っているのではないのです。コロナが収束しなくていいって意味じゃないんです。たとえそういうことになつたとしても、そこで終わりじゃない、そこにも大事な人生があるでしょということなんです。これが行き先が悪道であっても、あるいは地獄であっても、そこに必ず道は開けますという親鸞聖人のおっしゃり方ではないかということなんです。

続きをもうちよつとだけ読んでおきますと、

たとい、法然ほうねん聖人しょうにんにすかされまいらせて、念仏して地獄じごくにおちたりとも、さらに後悔こうかいすべからずそうろう。(聖典六二七頁)

「さらに」というのは、「決して〜ない」という強調の言葉です。ですから法然上人に騙されて念仏して地獄に墜ちたとしても、決して後悔はいたしませんと言ってるんですね。するはずがありませんというくらい強い言葉です。そしてその理由は、

そのゆえは、自余の行もはげみて、仏になるべかりける身が、念仏をもうして、地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔もそうらわめ。(聖典六二七頁)

他の行を励んで迷いを超える、仏になってしまえる私であれば、念仏申したために地獄に墜ちたならば、だまされたという後悔もあるでしょうということですね。法然上人の言うことを聞いてくつついていったとすれば、法然上人が間違ったら、「だまされた、信賴してたのに」となるでしょうね。でもそうじゃないんです。教えられたことがある。それが次です。

いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。(聖典六二七頁)

どんな方法をもつても迷いを超えきれない私であるし、どこに行っても次から次へと問題が起こってくる人生だということが、はつきりしたということです。これさえやっておけば問題に会わずにすむなんていうことは、誰も言えない。あれほど頑張ったんだから、私が問題に会う

はずないと、こんなことも決められない。想定外という言葉もよく聞きますが、人生そのものがもう始めから想定外なんですね。想定してなかったことが起こってくるのが人生なんです。そこが私の人生ですと言ってるのが、この「地獄は一定すみかぞかし」ということです。

これが浄土真宗の根本のご利益だと思います。地獄にもいられるという利益です。状況が自分にとつて都合のいいほうに動いた時だけいられるのではない。都合の悪いほうに動いたとしても、そこも大事な自分の人生の場として生きていく道をいただいでいく。

しかしこれも私が強い心になるというよりは、そうやって励ましてくださる方との出会いがあるからです。私たちで言えばお釈迦様もこういう中を苦しみながらも生き抜いていかれたに違いない。親鸞聖人もそうだったに違いない。蓮如上人もそうだったに違いない。あるいはうちの爺ちゃんもそう。婆ちゃんもそう。そういう方がたくさんいればいるほど、違ってくると思います。私だけがひどいめにあっている、私だけが苦しんでいるのではないのです。

なにがあっても文句を言うなとか、そんな話とは違います。問題を感じた時にはきちんと言わなければいけません、言ったからといって思うように動くかといったら、それはまた別問題です。それが動かない中にもまた道はある。なにも変わらない中をどう生きていくかということも、私たちの人生の中で多々あるわけです。そういう時に先達の顔や生き方、お言葉がただけるところに、この地獄の真つただ中にいられるようになるという利益が成り立つ。これが親鸞聖人の立たれたところだと思います。

「地獄は一定すみかぞかし」 ってすごいお言葉だなと思うんですね。コロナの状況の中でどう生きるかという時に、好転する日もあるでしょう、思わぬ形でもっとひどくなることもあるかもしれない。しかしその中にある人生の大事さというのは、増えたり減ったりしてるのではないですよ。本当に大事な人生、一回限りのかけがえのない人生があるんです。それをたくさんの励ましをいただきながら生きていくということ。親鸞聖人だったらこういうことをおっしゃってくださるんじゃないかなということ、考えさせられることです。

### 寛喜かんぎの内省ないせい

親鸞聖人は二十九歳の時、このように地獄が私のすみかだと決着がついた。ところがその親鸞聖人もそれで九十歳まですんなり行けたかといったら、そういうわけじゃないんです。これも『恵信尼消息』のお言葉から考えておきたいと思えます。この出来事は「寛喜の内省」と呼ばれています。寛喜二年という年号が始めに出てくるからです。この寛喜三年というのは親鸞聖人五十九歳の時のことでありまして、六十二、三歳ごろに京都に帰ってこられるので、まだ関東時代であります。

善信ぜんしんの御房ごぼう、寛喜三年四月十四日午うまの時ばかりより、風邪心地かぜちすこしおぼえて、その夕ゆうさりより臥ふして、大事におわしますに、腰こし・膝ひざをも打うたせず、天性てんせい、看病人かんびやうをも寄せず、ただ音おともせずして臥ふしておわしませば、御身をさぐれば、あたたかなる事火のごとし。頭かしらのうたせ給う事もなのめならず。(聖典六一九頁)

「風邪心地」と書いてありますから、親鸞聖人が風邪気がして寝ていたら、熱がものすごく出たといいですね。「天性、看病人をも寄せず」ですから、誰か近くにいるとそれだけでしんどくなる、誰も来るなど言うくらいきつかった状態なんですね。恵信尼様が親鸞聖人の体を触つてみたところ、「あたたかなる事火のごとし」と書いていますから、むちやくちや熱かった。火のように燃えるような高熱が出ていた。そして「頭のうたせ給う事もなのめならず」というのは、頭の痛い時は頭を軽く叩いたりしますが、どれだけ打つても収まらなかつた。尋常じゃなかつたというのが、「なのめならず」という言い方です。きつい頭痛と発熱で臥せっておられた。そうしたら、

さて、臥ふして四日と申すあか月、苦くるしきに、「今いまはさてあらん」と仰おほせらるれば、「何事なにごとぞ、たわごととかや申す事か」と申せば、「たわごとにてもなし。臥ふして二日と申す日より、『大經きやう』を讀よむ事、ひまもなし。たまたま目をふさげば、經きやうの文字もんじの一字も残のこらず、きららかに、

つぶさに見ゆる也。(聖典六一九頁)

親鸞聖人が「今はさてあらん」とおっしゃった。「今はそうしておこう」という意味です。それを聞いた恵信尼様は熱にうなされる中でたわごとを言われたのかと思つて、「何事ですか、たわごとですか」と尋ねたら、「いや。たわごとではない」と言つて、実は、伏して二日目から「大經を読む事、ひまもなし」と。そして目を閉じれば、『大無量壽經』の文字が一文字残らず出てきたというのですね。

さて、これこそ心得ぬ事なれ。念仏の信心より外には、何事か心にかかるべきと思つて、よくよく案じてみれば、この十七八年がそのかみ、げにげにしく『三部經』を千部讀みて、衆生利益のためにとて、讀みはじめてありしを、(聖典六一九頁)

なぜこんなことが起こるのかと思つたら、十七、八年前の時のことを思い出された。実際には建保二年、親鸞聖人四十二歳です。この時、何をしたかといつたら、『大無量壽經』、『觀無量壽經』、『阿彌陀經』の三部經を千部讀誦しようとしたというんですね。三部經を讀もうと思つたら、慣れた人でも一時間半以上はかかるでしょう。それを千セットですから、一日十セット讀めばまあいいほうだとすれば、千セット讀もうとすれば百日間かかるわけです。そういう

ことをやろうと思いついたというんですね。

なんのためかといったら「衆生利益」と書いています。人びとが困っているのをなんとか助けたいという思いから三部経を千セット読もうとした。飢饉や疫病でばたばたと人が死んでいくという状況の中で、「お坊さんなんとかしてくれないか」と、「仏教はこういう時になんの役にも立たないのか」と言われたかもしれません。一応は引き受けたんです。「わかった、やってみよう」と言つて、三部経を千回読もうとした。しかし結局、四、五日でやめてしまったということがあつたという話なんです。

そのことが、十七年経つてもういちど出てきたんです。この親鸞聖人が臥せつておられた寛喜三年は、前の年から飢饉が続いていて、たくさんの人びとが飢えて苦しみ、そして栄養失調になりますから免疫力が下がって病気もものすごく流行つて、たくさんの人が死んでいたような時代だそうです。だから四十二歳の時と同じ状況がまた五十九歳の時にもあつて、その中で熱にうなされて『大経』の文字が出てきたという出来事のようにです。

大事だなど思うのは、まわりで困っている人がいた時に、親鸞聖人は知らん顔ができなかったということ。お坊さん、なんとかしてくれんのか」と言われた時に、「いや、うちの宗派はそんなふうにお経を使わんのや」と言つてもよさそうです。しかしそうは言っていないんですね。「わかった」と言つて引き受けているわけです。でもその中で思い返してやめていった。

なぜやめたのか。やめた理由が大事だと思えます。引き受けた親鸞聖人もすごい。やつぱり放つ



ておけないんです。苦しんでいる人をなんとかできないか。一緒に田んぼを耕すわけにもいかない。土地もないし、そんな技術もない。では自分は何ができるんだと考えた時に、なんとかしようと思っただけです。

げにげにしく『三部経』を千部読みて、（聖典六一九頁）

この「げにげにしく」という言葉の「げに」というのは、漢字では「実に」と書きます。まことにそうだという意味でも使いますが、「げにげにしい」という時には、「もつともらしい」という意味になります。ここでは「いかにも坊さんらしく」ということでしようね。もつと言えば、いかにもお経を読んで人助けができるような顔をしてということでしょう。「げにげにしい」というのはそんな意味です。ここではけつして肯定的な意味ではありません。

お経の力を借りて衆生利益をできるような顔をして読み始めた。でもそれは違うと思つて、やめたんだという。なぜ違うのか。これは一瞬でも助ける側に回ったということを反省なさつたんだと思います。親鸞聖人は二十九歳の時に法然上人と出会つて、勉強したからといって煩惱が消えない危うい自分自身がわかつたわけです。好きか嫌いか、損か得かということを離れられない自分がよく見えたはずですよ。だから阿弥陀仏を念じて生きていかないといけないということが、決まつたはずなんです。ところがしばらく経つて、大変な状況の中でまわりから要

請された時に、「わかった」と請けあった。でもやっぱりこれは違う。なぜかといえ、私が助ける側になったということです。私も阿弥陀仏によつて、良い悪い、損得ということから解放されなきゃならない人間なんです。それなのに私がお経を読んで助けてあげましょうというのは、これはいつのまにか上から目線になってますよね。

今までに、末期の癌でもう余命宣告されて長くないという人のところに、何人かお見舞いに行つたことがあります。そのいちばん始めの時でしたけれども、私がなにも言えずにありましたら、向こうのほうから「癌でなくても死ぬからな」と言われました。私にはなんて聞こえたかというのと、「おまえはどうも俺のこと心配してるようやけれども、おまえ大丈夫か」というふうに聞こえたわけです。「おまえは俺を見舞つて、元気づけようと思つて来たかもしれんけど、おまえも死ぬんやぞ」と。

自分は健康な体で、むこうはもうあと余命わずかだということは知っていたのです。しかしなにも言葉が出てこなかつたわけです。それを見抜くかのように、「癌でなくても死ぬからな」つて言われた。ようするに、生きている人間がいるだけです。片や健康で、片や病気をかかえているという違いはあるかもしれませんが、どちらかが元気づける側で、どちらかが元気づけられる側つて、そんな関係じゃないですよ。その方の「おまえ大丈夫か」と聞こえたその言葉で、自分の人生を見つめ直す機会をいただきました。そのお言葉はずっと残りました。

人のことを心配するのはたいへん尊いことですけども、自分が大丈夫かということを手横に置い

ておいて、私がなんとかしてあげます、私が支援する側ですとか、私が助ける側ですというのは、どこかおめでたいんじゃないでしょうか。場合によっては、相手をかawaiiそうなる人として上から見下ろしているかもしれません。

そういう助ける側と助けられる側という関係ではないと気がついたのが、「げにげにしく『三部経』を千部読みて」という言葉になつていゝんです。いかにも坊さんらしく、いかにも助けられるような顔をして読んだ。しかしそうではなかつたということです。だからやめたんですよ。そのことがここに出できます。

名号みょうごうの他ほかには、何事なにごとの不足ふそくにて、必ずかなら経きやうを讀よまんとするやと、思おもいかえて、讀よまざりしことの、さればなおも少すこし残のこるところのありけるや。(聖典六一九頁)

「南無阿弥陀仏」と阿弥陀仏を念じて、阿弥陀仏にたすけられていく以外に、なにの不足があつてお経を讀もうとするのか。二十九歳の時には、行き先がたとえ地獄であつても、阿弥陀仏を念ずるところに、そこにも道をいただいでいくということを決着したはずで、状況が好転するから生きられるとか、状況が悪くなるならもう生きていられないのではなくて、良い悪いを言つてゐることから解放される道を法然上人から教えていただいたはずで、ところがそのためにお経を使つてとはいへ、自分が良いほうに向けますよとなつてゐる。これは南無阿弥陀仏を忘れて、

救うとはこういうことだとか、私はそれをできるはずだとか、こういうところにいるわけです。そう思いかえして読まなかったことが、五十九歳になつても「なおも少し残るところのありけるや」というんですね。四十二歳の時にお経の力を借りて私がなんとかしてやるというようなことは離れたはずなんですよ。もつと言えば、二十九歳の時の「生死出づべき道」という原点に立ち返つたはずなんですが、それが十七年経つてまだ残っていたようだと、親鸞聖人はおっしゃっているんですね。

### とらわれの心、自力の心

それを、

人の執心しゅうしん、自力じりきの心しんは、よくよく思慮しりよあるべしと思おもいなして後のちは、経読きょうよむことは止とどまりぬ。

(聖典六一九〜六二〇頁)

と言つています。「執心」というのはとらわれの心です。こうしなきゃならない、ああしなきゃならない。あるいは、これは良いこと、これは悪いこと。これは取り除くべきこと、これは手に

入れるべきこと。いろいろあると思いますが、とらわれの心です。これが残っていたと言っています。「自力の心」のほうは、これは私がなんとかしてやらないといけない、私ならできる。逆もありますね。私はぜんぜんダメだというほうに固まっている場合もありますけれど、自分で自分のことを量っているあり方です。それは「よくよく思慮あるべし」、このことをよく考えなきゃならない、よくよく思わなきゃならないと。

風邪の熱にうなされ寝ついている中で、二日目からずっと私がかしななければいけない、私が助けてあげなければと、それをお経の力を借りてと思うから、『大経』が一文を残らず出てきた。二十九歳の時に念仏ひとつで決着したはずの親鸞聖人、またもう一度、四十二歳になつて捨てたんですよ。でもそれが十七年経つて出てくる。このあとはどうだったんでしょうか。もうここでいよいよ自力は卒業したと見る人もいます。でも私はそうは思いません。

親鸞聖人は命終わる時まで「愚禿釋親鸞」ぐとくしやくしんらん、愚かな私と名のつてくださった人です。愚かというのは、自分中心にしか考えられないということです。やはりいくつになろうが自分の思いが正しくて、それにあうものを良しとし、あわないものを敵だと見なしていく心を持っているんです。親鸞聖人はそういう自分だということを見ておられますので、五十九歳で終わった話ではないと思います。その「人の執心、自力の心」をいよいよ見詰め続けていかれたのが、親鸞聖人なのではないでしょうか。

私たちは日頃、とらわれの心や自力の心で生きているのですが、それを問題とも思っていない

のです。仏法を聞くところに、あるいは南無阿弥陀仏に遇わせていただくところに、ここに問題があつたんだということが見えることがスタートだと思ふんです。日頃は執心も自力の心も問題にすら思わない。相手のほうがおかしいと思う。「なんであいつは」と言つて。

私ももう三十年も学生の前に立つてしゃべらせてもらつてしていると、いろいろなことが慣れてきたりするんですよ。パターン化して応答しようとしたりすると、通じないことがあるんです。そんな時に「ああ、パターン化なんかできないなあ」とすぐに思えればいいんですけど、「他の学生はスツと聞いてくれたのに、こいつはなんでや」とかね、「去年はうまくいったのに、なんで今年は」みたいな、そういう根性が湧くんですよ。ひとりひとりの人間、年も違えば、考え方も感覚も違うんですよ。それをこのパターンでかかわればなんとかなるなんて言えるはずがないのに、全部固定化していくんですね。それで届かないのは相手のせいだと思つてるわけです。本当は「あなたの言い方はわかりません」つて言つてもらつている。そうしたら、どうしたらいいのか、もうちょっと深く親鸞聖人にたずねていかないといけないなという大事なチャンスをもつている話なんですけども、自分のほうは良しとして、それで裁くんですね。

これを親鸞聖人は愚かと教えてくださつてると思ふんです。五十九歳でもう量らなくなつたとか、とらわれの心が消えましたなんていうことは、おつしやらないと私は思います。

さて、臥ふして四日と申すあか月、今はまさてあらんとは申す也」と仰おほせられて、やがて汗垂あせた

りて、よくならせ給いて候いし也。(聖典六二〇頁)

そして、「だから今はこうしておこうと言ったんだ」とおっしゃって、そこから、熱も下がっていったというんですね。

それをまとめて言っているのが、最後の文章です。

『三部経』、げにげにしく、千部読まんよと候いし事は、信蓮房しんれんぼうの四年とし、武蔵むさしの国くにやらん、上野かみづけの国くにやらん、佐貫さぬきと申す所ところにて、読よみはじめて、四五日ばかりありて、思いかえして、読よませ給たまわで、常陸ひたちへはおわしまして候いしなり。(聖典六二〇頁)

これは恵信尼様の文章です。この三部経を千部読誦されようとしたのは「佐貫」というところだったと。群馬県の邑楽郡佐貫というところなんです、まあ本当に武蔵国とも、下野国とも接しているようなところなんです。そして「常陸へはおわしまして候いしなり」ですから、今度は茨城県いばらけのほうに出向いたと、こういうことです。

二十九歳の時に、「生死出ずべき道」、善し悪しを量っていることから解放される道をいただいた。これが法然上人との出会いの中身なんだということを言いました。これがいろいろな状況が起こってくる中を、なおも生き抜いていく道が見えてくる筋道だと思います。しかしそれは、一

回見つかったらあとは大丈夫という話ではないということですね。やっぱり現実問題、人間関係の中で、今まで見えていたことがぶれていくことが、親鸞聖人でもあったということです。それを恵信尼様がきちつと書いてくれているということが、私は大事だと思っただけです。

なぜ書かれたのかというと、娘の覚信尼様は「お父さんほんとに往生したの」ということを聞いている。死に方にもちよつと引っかかりがあったのかもしれない。あるいは信心決定けつじやうしたらもう迷わなくなる、愚痴ぐちを言わなくなる、文句も言わないような人間になるというように、娘の覚信尼様は思っていたのかもしれない。ところが教えによつて歩んでいくことが決まっても、人間は揺れ動くのですよ。これを言っておかないといけないのが、お母さんのこの第五通目を書き記したお心じやないかなと私は思うんです。その前にも一回「二月十日」っていう日付がありますから、そこで終わっても良かったんですが、これも言っておかないといけないということです。

信心決定したらいつでも晴れているようなイメージ、問題がない人生が一本道でつながっているようなイメージをお持ちの方は非常に多いです。しかし信心決定とはなにかと言ったら、自分とはとられる心で振り回されておるなあ、自分が自分かという心で生きておるなあということが問題だったということがはつきりするということなんです。

そこに意見があわない人とも、関係の中で共々に語りあつていたり、確かめあつたりすることが起こる。そうしたら関係が広がっていきますよね。これが阿弥陀仏が照らし出してくださる



繋がりになんだと思うんですよ。この「執心」とか「自力の心」で繋がると、都合の悪いものは排除して、都合の良いものばかり寄せるわけです。大きなグループもできるかもしれないませんが、それは意見があわない人を入れないような集まりになってしまいます。それは仏法の僧伽さんかでも何でもないですね。ただ利害が一致している関係だと思えます。

それが問題だということがはつきりしたというところに、いよいよ本当に教えを聞いていくことが開かれるのであって、それを娘はひよつとしたら勘違いしているかもしれない。信心獲得ぎやくとくしたら、あるいは念仏ひとつで決着したら、もう愚痴も言わないような完璧な人間が誕生すると思っているんじゃないかということを思われて、恵信尼様はこの文章を足していったんだと思います。

だから一言で言えば、信心決定しても迷う時は迷うということですよ。ウロウロするんです。しかしそれがいよいよまた、阿弥陀仏の教えに帰っていく、あるいは法然上人からいただいた世界に帰っていく縁になるわけです。そうなれば、戸惑うことも、いろいろな問題の中で泣き叫んだりわめいたりすることも、ダメなことじゃないんですよ。それもまた大事なことを確かめていく縁だと思えます。

今日いただいたテーマで言えば、「コロナの中でもたくましく生きられる私になる」みたいなイメージがあるかもしれませんが、そうではなくて、泣き叫ぶ時もあると思うんですよ。実際、親鸞聖人は三部経千部読誦やめたら、一緒に泣くしかないんじゃないですかね。私になんとかし

てやるという時には華々しい、お経の力でこの状況を打破してやるといった時に勇ましいけれども、「いやあ私の力では退散できません。飢饉や疫病どうもできません」と言うなら、ある意味で敗北といえれば敗北かもしれませんが、ここに一緒に悩む、友としてという道は与えられるのではないのでしょうか。そこに立たれているのが、共に凡夫として生きられた親鸞聖人ではないかと思えます。

### 他力の信心うるひとを

最後に親鸞聖人が私たちのことを讃めたたえてくださるお言葉をふたつほど見ておきたいんですが、ひとつは報恩講の御満座で必ず読まれる御和讃です。

他力たりにきの信心うるひとを

うやまいおおきによろこべば

すなわちわが親友しんぬみとぞ

教主世尊せそんはほめたまう

(聖典五〇五頁)

「他力の信心」ですから、阿弥陀仏によつて大事なことを知らされながら生きていく、そういう信心を得た人を、「うやまいおおきによるこべば」と書いてありますが、これは前にかかつていまして、他力の信心を得るところに、仏法を敬いあるいは教えを大事にして喜びを持って生きていくとつながります。「他力の信心をうる人は、敬いおおきに喜んでいるので」と読んだらいいと思います。それを「すなわちわが親友とぞ 教主世尊はほめたまう」、お釈迦様は私の親友だと讃めてくださるということですよ。

弟子とは言わず、私の親友だとおっしゃる。なぜかという、仏法をいただきながら、いろいろなことがあるこの世の中を生き抜いてくださるからです。「私と同じような仕事を担になつてくださる」とおっしゃっているのです。それは影響力とか、上手にしゃべれるとか、そういうことはお釈迦様とは比べものにならないでしょう。しかし仏法がなかつたら、私たちはとらわれの心か自力の心に振り回されるしかないのですから、それが問題ということを知つて、それから解放され続けるような生き方は、お釈迦様が教えようとしたことそのものです。だから教えをいただいで、それを家族の中でとか、友達の中でとか、あるいはまわりの人との中で、「人間の根性って危ないよねえ」と、「自分を中心にしたら人を敵にしていくよね」と言つていく。そういうことも大事だと讃めてくださっているのが、このお釈迦様の「私の親友だ」というお言葉です。

こちらから言う話じゃないですよ。また私が立派になつたという話でもなく、仏から言つてくださるんです。問題の中で愚痴を言つたり、泣き叫ぶこともあるし、逃げ出したこともあるよ

な私なんですよ。立派な強い私になつてゐるわけじゃない。しかし教えをいただく時に、いろいろある中を、「ああ先達もこうやって生きていったか」「うちの先祖もこうやって生き抜いてこられたか」と言つて、その中をたくましく生きていく力を賜るといふことは、ありうるということですよ。その全体がお釈迦様から見れば、この世の中に仏法をとどけてくださっている大事なことだと讃めてくださるということです。ここだけとつてね、凡夫が偉い者になつたという話じゃないですよ。煩惱具足の凡夫は変わらないのです。けれども仏法をいただいて生きていくところに、お釈迦様の親友とまで言われる世界がある。

もうひとつは、

真実信心うるゆえに

すなわち定聚じやうじゆにいらぬれば

補処ふしよの弥勒みろくにおなじくて

無上覚むじやうかくをさとるなり

(聖典五〇二〜五〇三頁)

こういう御和讃です。真実信心を得るからすなわち「定聚」に入る、間違ひなく迷いを超えて人生を完結していくことができる。仏の覚りのところまで、歩みを進めていくことができる。そういうものに加えられるのです。それを「補処の弥勒におなじ」と言っています。「補処」の「補」

というのは「おぎなう」という字ですね。「処」というのは「ところ」、これは仏処、仏様のところですよ。だから仏様のところを補うということで、仏様のあとを継いでいく人という意味です。お釈迦様の跡継ぎは弥勒菩薩みろくぼさつです。

お釈迦様が亡くなって、この世が本当に問題だらけになってきた時、そこにまた弥勒菩薩が現れる。こういう信仰は親鸞聖人の時代、ものすごく盛んでした。「お釈迦様がいない今は弥勒さんだ」と言ってる人はいっぱいいたんですよ。これは現代風に言ったら、救世主待望論です。世の中が不安定になってくると、誰か世の中を救ってくれる人が出てこないかとなる。本当にどうすることもできない状況の中で、弥勒が求められるんです。聖人の時代もそんな時代だったんですが、その時に親鸞聖人は、「いやいや。弥勒菩薩を待たなくてもいいよ」と言うんです。なぜなら「あなたが弥勒と同じだから」と。私たちが南無阿弥陀仏を申して阿弥陀仏に道を教えられながら生きていくということは、もう何万年も先の話でなくて、今ここで仏様の世界がいただけることだという、こういう讚め言葉なのです。

弥勒菩薩を待つのではなく、実はひとりひとりが、手間と時間がかかるかもしれませんが、仏様の教えをいただいて生きる道を明確にしてくださいというのが、親鸞聖人からの呼びかけのようだと思います。旗振って、いかにも魅力的で、「こつち来たらいいぞ」って言っているのは、実は怪しいかもしれないということなんです。

八百年前は弥勒信仰がとても盛んでした。形を変えていろいろな宗教が流行ったりするのは、

現代も質的には同じだと思います。この人についていけば明るい未来を与えてくれるかもしれない。私たちはこう思っついていくんですけれども、そうではなくて、明るいか暗いかを超えて生きていく道が大事なんです。

念仏して生きる人、信心に立って生きる人はもう弥勒と同じですよと、親鸞聖人はここまで言うてくださっている。私たちへの大きな讃め言葉、励ましたと思います。弥勒ですらそうなんですから、怪しい救世主についていくなという呼びかけとして、私には聞こえます。

**一楽 真** (いちらくまこと)

1957年、石川県生まれ。現在、大谷大学教授。真宗大谷派  
小松教区宗円寺住職。

著書

『釈尊の呼びかけを聞く 阿弥陀経入門』(東本願寺出版)

『親鸞聖人に学ぶ 真宗入門』(東本願寺出版)

『この世を生きる念仏の教え』(東本願寺出版)

『親鸞の教化—和語聖教の世界—』(東本願寺出版)

『大無量寿経講義—尊者阿難、座より起ち—』(文栄堂)

『四十八願概説—法蔵菩薩の願いに聞く—』(文栄堂)

他多数

---

生死出ずべき道 コロナの時代、私たちはいかに生きるべきか

---

2021年8月6日 初版

講述：一楽 真

編集・発行：真宗大谷派大阪教区第十二組

発行人：組長・越浦 龍成

事務局：組教化委員会総合部会・澤田 見

大阪府守口市土居町7-23 (〒570-0073)

Tel 06-6993-7880 Fax 06-6992-9714

Email kem@iris.eonet.ne.jp

---

装画：新井 徳行

装幀・組版：澤田 見